

# ブルーストとセヴィニエ夫人<sup>1)</sup>

池 田 潤

周知の通り『失われた時を求めて』という小説は現実の芸術・文化に多く言及しており、百科全書的な様相さえ呈している。文学に関する事柄に限っても言及される作家・作品は相当な数にのぼり、かつそれらの言及はこの大長編の全編にわたってちりばめられている。さらにその特徴として、個々の文学作品についてひとり語り手のみが自分の見解を披瀝し論を展開するのではなく、さまざまな登場人物がそれぞれに自分の仕方について語っている点が挙げられる。そしてこのことから次の3つの疑問が生じるであろう。まず、登場人物たちはどのように文学作品について語っているか。ふたつめに、それらの人物はどのように描かれているか。みつめめに、小説中でブルーストの個人的見解は述べられるのか。

これらの問題について本論では小説中のセヴィニエ夫人への言及を取り上げて検討したい。セヴィニエ夫人を取り上げるのは、ひとつには十分な数の言及があり単独でも先の論点が検討できるからである。和田章男の統計<sup>2)</sup>によると、『失われた時を求めて』最終稿のセヴィニエ夫人への言及回数は33回で、バルザックの40回に次いで2番目に多い。また同じ調査によって、推敲の過程でボードレールやフロベールなどの実在の作家への言及が大きく減っているのに対し、セヴィニエ夫人は草稿と最終稿の間で言及回数にほとんど変化がないことも指摘されている。ブルーストの読者にとってこの調査結果が少し意外なのは、セヴィニエ夫人はブルーストにとって相対的に重要度の低い作家と考えられているためである。セヴィニエ夫人は、『サント＝ブーヴに反論する』その他の批評的文章で論じられたことはなく、パステューシュも残されていない。初期作品においても、『楽しみと日々』ではエピグラフに一度使われただけであり、『ジャン・サントゥイユ』では全く言及されない。しかし全く関心がなかったわけではないことは、1920年12月2日のエミール・アンリオ宛書簡を見てもわかる。

三流詩人であったテオフィル・ゴーチエのように、ラシーヌの最も美しい句は「ミノスとパシファエの娘」だと言うことほどばかげたことはない。むしろラシーヌの悲劇、彼の『賛歌』や、セヴィニエ夫人の手紙、ボワローのうちには、真実そこにあるのに17世紀がほとんど気づいていなかった美を我々は味わうことができる<sup>3)</sup>。

ラシーヌ、ボワローとともに17世紀の古典作家として、セヴィニエ夫人の手紙にもブルーストは美を見出している。しかしこの書簡では、17世紀には気づかれていなかったとされているこの美

がどういものであるのか、具体的な論は展開されない。このように守られる沈黙と『失われた時を求めて』における言及の多さは対照をなしている。

ブルーストとセヴィニエ夫人の関係を論じたこれまでの研究は、テーマの相同性を指摘したものが多く、ダグマー・ヴィーザーは『失われた時を求めて』の母と語り手の別離をセヴィニエ夫人と娘の関係になぞらえている<sup>4)</sup>。エリザベス・レイデンソンは精神分析的に母性のテーマを扱って同様の関係を論じている<sup>5)</sup>。一方生成研究の分野では、吉田城が小説中のラスキンへの言及がセヴィニエ夫人への言及にとってかわられた推敲の過程を跡付けている<sup>6)</sup>。

本論では、テーマ的ほめかしや文体的影響は考察の対象からはずし、言及が明示的な場面でのセヴィニエ夫人の語られ方の構造を明らかにする。これにより、『失われた時を求めて』の、小説と批評の総合といわれるあり方についての示唆を得ることを試みる。

## 1. 人物たちによるセヴィニエ夫人の評価

17世紀の貴族ラビュタン＝シャンタル家に生まれ、アンリ・ド・セヴィニエと結婚したセヴィニエ夫人の手紙は、パリの社交界で評判をとっていた。その文章の美しさは現在でも文学的価値を認められているが、とりわけよく読まれているのは1671年2月6日以降のものである。この2日前に娘のグリニャン夫人は夫の任地であるプロヴァンスに向けて発っている。娘に宛てて彼女が書いた膨大な量の書簡はどれも、過剰なまでの母性愛や別離の悲しみの表現にあふれ、娘の健康を気遣う気持ちや再び会えることへの期待などが、自分の身の辺の出来事やパリの宮廷の事件とまじえて語られる。

書簡集が初めて出版されたのはセヴィニエ夫人の死後38年たった1734年である。ブルーストが読んだ刊本を特定することはできないが、ピエール＝ルイ・レイは『失われた時を求めて』に登場する書簡集は「フランス大作家叢書」のシリーズとして1862年アシェット社から刊行された、編集者の名をとって普通モンメルケ版<sup>7)</sup>と呼ばれているものであると推測している<sup>8)</sup>。これは全10巻の大型本で、セヴィニエ夫人の書簡を網羅したものとしてブルーストの同時代では最新のものであった。

『失われた時を求めて』でセヴィニエ夫人がもっとも頻繁に言及されるのは『花咲く乙女たちのかげに』のバルベック滞在の部分である。語り手が祖母と一緒に出かけるこの海辺の保養地では、人物たちの間でセヴィニエ夫人についての意見が交わされる。ではどの人物がどのように語っているのか、バルベック以外の場面も合わせて検討してみよう。

### 祖母の正統的読解

まず、語り手の祖母は架空の回想録作家ボーセルジャン夫人の回想録とセヴィニエ夫人の書簡集の愛読者という設定になっている<sup>9)</sup>。実際、小説全体で祖母は5回もセヴィニエ夫人の手紙の引用をしており、その偏愛ぶりが読者に印象づけられる。

その祖母がセヴィニエ夫人を評価する点としてまず、会話における機知がある。コンプレーでヴ

イルパリジ夫人と出かけた祖母は、立ち寄った仕立て屋で主人の言葉に感銘を受けて帰ってくる。

彼女は仕立て屋のした返答にうっとりとしていて、ママにもこう言った。「セヴィニエにもああうまくは言えなかったでしょうね。」<sup>10)</sup>

ここではセヴィニエ夫人の文章が引用されているわけではないが、仕立て屋についての彼女の言葉から、セヴィニエ夫人が表現の才能に秀でた人物の模範のように考えられていることがわかる。

また「自然さ」も祖母がセヴィニエ夫人に認めている美点である。次の引用は祖母がサン＝ルーを評価する仕方について書かれた部分である。

けれども祖母がサン＝ルーの自然さをとりわけ賞賛していたのは、彼が、私に対して抱く好意を婉曲を抜きにして表明するその仕方や、彼女に言わせると彼女自身もそれ以上に的確で真に愛情に満ちたものは思いつかなかったような言葉で好意の表現をする仕方、それらの言葉は「セヴィニエヤポーセルジャン」でも同意したことであろうということであった。<sup>11)</sup>

祖母がサン＝ルーの振る舞い、ことにその発言についてそれがセヴィニエ的だとして高く評価しているのは、その率直さ、表現の的確さ、また真情のこもった親愛の念の発露という点である。ここでも読者は祖母がセヴィニエ夫人の手紙をどう評価しているか間接的に知ることになる。

セヴィニエ夫人のこのような評価は、すでに彼女の同時代人によってなされていた。スキュデリー嬢は小説『クレリー』の中で、セヴィニエ夫人をモデルにしたとされているクララント王女という人物を次のように描写している。

彼女の会話は気持ちがよくて、おもしろくて、自然である。彼女は的確に話す。彼女は上手に話す。彼女は、また時には、限りなく楽しい、素朴で機知に富んだ表現をすることもある。<sup>12)</sup>

スキュデリー嬢の語っていることは、先に挙げた祖母によるセヴィニエ夫人の評価の仕方と大きく重なる。また『クレリー』はあくまでフィクションだが、同じ時代にラファイエット夫人はもっと直接的に、セヴィニエ夫人のポルトレを書いている。

あなたの言うことはすべて魅力的でしかも実にあなたらしいから、あなたの話は笑いと優雅さをあなたのまわりにめぐらせる。<sup>13)</sup>

ここでも評価されているのはセヴィニエ夫人の会話の才能である。しかも、このような評価はスキュデリー嬢やラファイエット夫人の個人的な見方にとどまらず、広く共有され正統的なものになっていった。1866年から1877年にかけて出版された『19世紀ラルース大百科事典』の「セヴィニエ夫人の手紙」の項目は次のように彼女の文章の自然さと繊細さについて説明している。

セヴィニエ夫人のような表現の細やかさ、言語の繊細さ、きめ細かな陰影の秘密を持つ者はいない。彼女の語りは見事であって、忘れがたいものである。彼女は、ラ・フォンテーヌが自己の文体を創造したのと同じ自然さで、自分の文体を発明した。<sup>14)</sup>

ところが一方で、同事典は次のようにも書いている。

近くにいっても離れていても、彼女は自分の娘にかまってばかりいて、娘に関係のある人やものごとにし興味を持たなかった。あらゆることが母性愛を脅かし、また増幅した。彼女の手紙はあまりにも熱狂的な優しさ、あまりにも激しい情熱を表している、それが誠実なものだとは信じない批評も存在する。<sup>15)</sup>

このように『19世紀ラルース大百科事典』は、セヴィニエ夫人の愛情表現をその手紙の特徴のひとつとして挙げながら、それに対する批判があることも指摘している。セヴィニエ夫人の手紙において娘への愛情という要素は手紙の書かれた動機そのものでもあり、内容的にも大きな割合を占めている。しかしその表現は時に過剰であると受けとられることもあり、彼女の手紙の文学的価値をめぐる論点のひとつとなっている。では『失われた時を求めて』の人物たちは、この点をどう語っているだろうか。

#### ヴィルパリジ夫人の批判的意見

祖母はバルベックに滞在している間、毎日語り手の母と手紙のやり取りをしていることになっている。この場合旅によってパリから離れていったのは祖母のほうなのでセヴィニエ夫人とは事情が逆だが、遠方にある娘と絶え間なく書簡を送りあうという点は重なっている。しかしこのまさにセヴィニエ夫人的な行為を、バルベック滞在中のヴィルパリジ夫人が揶揄する。

「[……]なんですって、娘さんは毎日手紙をおよこしになるの。でもよく話すことを見つけるわね。[……]ああ、あなたはセヴィニエ夫人をお読みになるのね。[……]あんなふうにも娘を心配するのは、少し大げさだとは思いませんか、心からのものというには、少し言いすぎです。自然さが欠けているわ。」<sup>16)</sup>

ここではセヴィニエ夫人の愛情表現が、とりわけその自然さについて疑問に付されている。たしかに、セヴィニエ夫人が娘に宛てて書く手紙は毎回似たような愛情と気遣いの表現にかなりの紙幅を割いており、こうした批判が出てくるのは当然のことなのかもしれない。

では『19世紀ラルース大百科事典』が言及していたような、セヴィニエ夫人の表現の誠実さを信じない批評とは具体的にはどのようなものなのだろうか。1862年にフランス大作家叢書のシリーズに入ったことからわかるように、19世紀にはセヴィニエ夫人の古典作家としての評価は固まっていたようである。セヴィニエ夫人の批評の歴史の中では、書簡集が初めて出版された1734

年ごろに批判的な意見を見ることができる。ラリヴィエールというセヴィニエ夫人の遠い親戚が1735年に書いた書簡には次のような一節がある。

この母親の自分の娘への感情は、あまりにも繰り返しが多く、また激しい恋に似ていて、愛する男が愛人に宛てて書いたのかと思うほどだ。<sup>17)</sup>

またアンフォッシという人物も次のように書簡に書いている。

娘への優しさは、かなり奇妙な性質のものだ。その点についてアルノー氏の道徳に従ってくれたら、と望むことさえある。そうすれば、この読者を疲れさせる繰り返しも免れることができたらうから。<sup>18)</sup>

セヴィニエ夫人の愛情に満ちた表現が素直で自然なものだと評価される裏側には、その全く逆の受け取り方をする読者もいたということが確認できる。ブルーストは、祖母とヴィルパリジ夫人という二人の人物にその一方ずつの受容の姿勢を与えている。

#### シャルリュスの擁護

ヴィルパリジ夫人は別の場面でも祖母に向かってセヴィニエ夫人を批判する。この時にはシャルリュス男爵も議論に加わる。

ヴィルパリジ夫人は彼 [シャルリュス] に、祖母のためにセヴィニエ夫人が滞在していた館がどんなものだったか説明してくれるように頼み、そのついでに、あの退屈なグリニャン夫人と別れる絶望のうちには少し文学的なものが見えると付け加えたのだったが、そのヴィルパリジ夫人に対して男爵はこう答えた。「むしろ、あれほど真実なものはないと思われます。それに、その当時はそういった感情がよく理解されましたのです。[……]」

祖母は『手紙』がまさしく自分がするような仕方で語られるのを聞いて喜んだ。彼女は、男の人がそんなにもよく手紙を理解できるということに驚いたのだった。<sup>19)</sup>

ヴィルパリジ夫人はここでも先に挙げた場面と同様、セヴィニエ夫人の表現がつくりものめいていると主張する。それに対してシャルリュス男爵は、『手紙』の文面に書かれている感情の表れは真実のものと反論している。また言うまでもなく、そのあと祖母が感じている驚きはシャルリュスの同性愛的傾向を暗示する伏線となっている。

19世紀にはセヴィニエ夫人の評価が不動のものであったと先に述べたが、その文学的価値の擁護にはサント＝ブーヴも加わっていた。彼は1829年5月3日の『ルヴュ・ド・パリ』誌に「セヴィニエ夫人」という文章を載せている。

セヴィニエ夫人は、その手紙の純情さが疑問に付されたが、娘への愛情の誠実さも同様に疑問視されて

きた。[……] 別離は彼女の優しさをかきたてるだけだった。他のことはほとんど考えもしなかった。[……]この高貴でほとんど独自の心の中の愛情は、ついには彼女の態度そのものとなり、彼女はそれを扇子のように必要とするようになった。しかもセヴィニエ夫人は全く誠実で、偽りの外見を敵としていた。<sup>20)</sup>

この文章でサント＝ブーヴは、セヴィニエ夫人の誠実さを疑う議論に対して彼女を弁護している。このサント＝ブーヴの立場はほとんどそのまま、ヴィルパリジ夫人に反論するシャルリュスという構図と重なる。

また、シャルリュスは同じ場面でセヴィニエ夫人とラシーヌの比較をする。

「しかし、人生において重要なのは愛の対象ではなく」と彼[シャルリュス]は権威のある、反論を許さない、ほとんど断固とした口調で付け加えた。「愛することです。セヴィニエ夫人が自分の娘に感じていたことは、若いセヴィニエが愛人たちと結んでいた凡庸な関係などよりもはるかに、ラシーヌが『アンドロマック』や『フェードル』で描き出した情熱と似ていると言えるでしょう。」<sup>21)</sup>

ラシーヌの悲劇が引き合いに出されるのは、不動の評価を得ているこの古典作家と同列に論じることでセヴィニエ夫人の愛情が高貴で真実なものであると主張するためであろう。またシャルリュスは何の留保もせずに、セヴィニエ夫人の母性愛を男女の愛と同じように論じている。これは、先のラリヴィエールの書簡にもあった見方だが、このシャルリュスの発言ではそれは肯定的な評価に逆転されている。

以上のように『失われた時を求めて』におけるセヴィニエ夫人への言及には、批評的言説が登場人物に割り振られてそれぞれの口から語られているという構造があるといえる。オーソドックスな評価をする祖母、文学的価値を疑うヴィルパリジ夫人、それに反論する形で再評価するシャルリュスという配置は現実の批評を反映したものである。

## 2. セヴィニエ夫人と祖母の結びつき

次に、セヴィニエ夫人について語る人物の配置の中で祖母が中心に据えられていることを確認したい。このことは、祖母が書簡集の愛読者でしばしば会話の中で引用していることからすでに自明のことでもある。しかしこの設定のほかにも、語り手とその母が果たしている役割は大きい。この二人はともに、祖母によってセヴィニエ夫人の書簡の価値を知り、祖母を特権的な読者とみなしているからである。

### 導き手としての祖母

とくに母は祖母が死んだ後『手紙』を自分の愛読書にして、自分も時々引用さえするようになる。このように祖母の趣味が母へと引き継がれていく様子は、祖母がまだ生きていて病気で寝ているときにすでに現れている。次の場面は病気の祖母のもとに元ナッソー伯から手紙が送られて

くる場面である。

私は祖母の病気の間彼が絶えず送ってくる手紙に非常に感動した。ママもまた心を動かされて、自分の母親の言葉を悲しげに繰り返すのだった。「セヴィニエにもああうまくは言えなかったでしょうね。」<sup>22)</sup>

ここで「自分の母親の言葉」と言われているのは、先に挙げたコンプレーでの祖母の発言である。「セヴィニエにもああうまくは言えなかったでしょうね」という言葉は一語もたがわずそのまま繰り返されている。また先の場面で仕立て屋の主人が言った言葉が読者に知らされないのと同様、この場面でも元ナッソー伯が書いた文面は明らかにされない。つまりこれらの場面ではセヴィニエ夫人にもまさる発言の内容ではなく、ある発言をセヴィニエ夫人に照らして評価するその価値判断の仕方と、その仕方が祖母から母へと受け継がれたことが主題になっているのである。

祖母が死んだ後、母は祖母を慕う気持ちからセヴィニエ夫人を愛読するようになる。母にとってセヴィニエ夫人よりも祖母の思い出の方が重要であることは、「祖母がいつも携えていたセヴィニエ夫人の本は、母がセヴィニエ夫人の手書き書簡とさえも取り替えなかつたらろう刊本だった」<sup>23)</sup>という記述からもうかがえる。会話の中でセヴィニエ夫人を引用する時も「あなたのお祖母さんがセヴィニエ夫人を引用して言うように」<sup>24)</sup>という前置きをつけられることが多く、祖母の趣味が参照され、規範になっていることが示される。次のような場面も、そのことを読者に強く印象づける。

「ところがそうなのよ」と母は優しい声で答えた。「私こそ、一番尋常でないニュースを持っているのよ。『一番大きく、一番小さな』とは言いません。セヴィニエ夫人といえはそれしか知らないような人たちによってされるそうした引用は『刈り草を干すのはなんともおもしろいものです』と同様、あなたのお祖母さんをむかつかせましたから」<sup>25)</sup>

この会話で、母は「祖母をむかつかせるような」引用の例を2つ挙げている。前者は1670年12月15日に書かれた、ルイ14世の従姉の結婚を知らせる有名な手紙<sup>26)</sup>で、「こと」choseという語に「一番大きく、一番小さな」など、たくさんの形容詞が単純な撞着語法で列挙されてかけられる、特徴的な文章を含んだ手紙である。後者は1671年7月22日の手紙<sup>27)</sup>で、今日セヴィニエ夫人の手紙の中でおそらくもっともよく知られているものである。母は代表的な手紙を挙げた後で、「それしか知らない人たち」と祖母を対極に置こうとしている。そしてこのように、書簡集を通り一遍読んだだけの読者と祖母を対置させる態度は、語り手にも共通している。バルベック行き of 汽車の中で、語り手が祖母に手渡されて『書簡集』を読むという場面がある。

[……] 私は祖母が手渡してくれた本を開いて、あちこち開いたページに注意を固定することができた。読んでいくうちにセヴィニエ夫人への賞賛の念が膨らんでいくのを私は感じていた。その時代やサロンの生活にまつわる純粋に形式的な特徴にだまされてはいけない。そうした特徴はある

種の人々に「知らせてください、かわいい人」とか「あの公爵様は大変才気があるようです」とか「刈り草干しは世界で最も美しいものです」とか言うことで彼らのセヴィニエ風がやれたと思ひ込ませるものだ。[……]

しかし私の祖母は内部から、家族や自然への愛からセヴィニエ夫人に到達していたので、私にもまったく別種のその真の美を愛することを教えてくれていた。<sup>28)</sup>

先に母によって言及された「刈り草干しの手紙」はここでもまた、いかにも軽薄な読者が引用しそうな例として挙げられている。そういった読者が、17世紀の語法やサロンの言葉遣いといった表現の表層に満足しているのに対し、祖母は「内部から、家族や自然への愛から」セヴィニエ夫人を読み、理解しているのだと語り手は述べる。

祖母がセヴィニエ夫人を愛読する動機は、そもそも彼女自身のうちにある家族への愛や自然への愛にあるという説明だが、このうち家族への愛については、娘への愛情表現がセヴィニエ夫人の文章の特色のひとつであり、またこの点についての批評的評価は定まっているということをすでに確認した。一方セヴィニエ夫人の自然への愛については、ブルースト自身が次のような文章を書いている。

「私はこの町の特異な美しさに魅せられています。昨日、天気は神々しいばかりで、海や、岩や、山や町を眺めることのできる場所は驚くばかりのものです。[……]」確かにこれは私の好むようなセヴィニエ夫人の手紙ではない。しかしそうであっても、その構成、色彩、多様性という点で何とルーヴルの「フランス絵画の間」にもふさわしいような画布をこの作家は書き得たのだろうか。<sup>29)</sup>

自分の好みではないという留保を残しながらも、ブルーストは自然の美しさを描くセヴィニエ夫人の文体を賞賛している。またこのことが少なくとも19世紀においては一般に認められていたということが、次のような記述が1889年出版の『19世紀新ラルス・イリュストレ』の「セヴィニエ夫人の手紙」の項目に見られることからわかる。

彼女は田舎と自然をまるで目や心の気晴らしをさせる見世物のように愛した。彼女はそれを、簡素だが優美で新鮮な仕方です描いた。<sup>30)</sup>

家族への愛と同様、自然への愛もセヴィニエ夫人の文章の特色として19世紀には広く認知されていたのである。先に、祖母がセヴィニエ夫人を評価する点として会話における機知と表現の自然さがあり、またその観点が正統的なセヴィニエ夫人受容と共通していることを確認した。祖母がセヴィニエ夫人を愛好する理由として挙げられた、家族と自然への愛についても同じことが言えるだろう。語り手と母によって表層的な理解しかしていない読者たちと対置された祖母は、独創的な読み方をしているわけではないにせよ正しい批評能力を備えた人物とされている。



## 愛読者のモデル

ところで、語り手と母によってこのように一種の権威にされている祖母の姿はプルーストの現実の祖母であるアデル・ベルンカステルとどの程度重なるのだろうか。

ジャン＝イヴ・タディエによるプルーストの伝記<sup>31)</sup>では、彼女はセヴィニエ夫人を読む女性だったということになっている。しかし、これは実証的な根拠のないことなのかもしれない。セヴィニエ夫人研究者のロジェ・デュシェーヌは、プルーストの祖母はセヴィニエ夫人を読んでいなかったのではないかと疑っている<sup>32)</sup>。確かに彼が指摘するとおり、プルーストの書簡の中には祖母がセヴィニエ夫人の読者だったことを示す記述は見当たらない。一方、プルーストの母は書簡で何度かセヴィニエ夫人に触れており、しかもそのうちのひとつには祖母とセヴィニエ夫人を重ね合わせるような記述がある。

ときどき、セヴィニエ夫人の中にも私を喜ばせてくれる考えや言葉に出会います。彼女は言っています  
(自分の友達のことをその息子に対し批判しながら)

「私は自分のことはほとんど顧みず自分の子供のためにすっかり身をささげてしまったもうひとりの母親を知っています」

このことはあなたのお祖母さんにもあてはまらないでしょうか？ただお祖母さんはそう言いはしなかったでしょうけれど。<sup>33)</sup>

引用されている手紙の中でセヴィニエ夫人はもちろん、娘に全てをささげている自分自身のことを書いている。プルーストの母は、自分の母親も同じくらい娘思い、また孫思いだったと言っているのである。実はこの手紙が書かれる数ヶ月前の1890年1月にプルーストの祖母は亡くなっており、母はその悲しみの中でセヴィニエ夫人を読んでいる。

またその少し前の1889年9月の母からの手紙には次のような部分がある。

デュ・ドゥファン夫人との関係だけが退けずにはぐくんでいける唯一のものです。彼女は私を楽しませてくれます。けれども決して、レミュザ夫人との関係でそうであるように、心からの親密さで結ばれることはないでしょう。<sup>34)</sup>

ここで母がしているのは彼女の読む本の話である。デュ・ドゥファン夫人は18世紀の女性で、書簡集が有名である。レミュザ夫人はナポレオン1世の時代について書いた回想録と『女性の教育についてのエッセー』という著作を残している。

これら2つの書簡から次のことが言えるだろう。まず、祖母が現実にセヴィニエ夫人の手紙を読んでいたかどうかにかかわらず、その死後、母が両者を結びつけて語ることがあった。小説のモデルになったのは現実のその部分であって、祖母がセヴィニエ夫人の愛読者であったというのはそこから作られたフィクションなのではないか、ということ。もうひとつは、先に見たように小説中の祖母が偏愛する作家としてもうひとり、ボーセルジャン夫人という架空の回想録作家が

いることも考えると、過去の女性によって書かれた書簡集や回想録を読む女性というこのイメージはブルーストの母に発しているのではないか、ということである。

以上のように、批評史的な観点から見てセヴィニエ夫人のオーソドックスな読者である祖母という人物は、また語り手自身によっても『手紙』の真の理解者として扱われている。そしてその人物造形にフィクションの度合いが少なからずあるとすれば、彼女がセヴィニエ夫人について語っていることにはブルースト自身の考えが反映されているのではないかという推測がされるだろう。そこで次に、祖母がセヴィニエ夫人を読む姿をもっと詳しく検討したい。

### 3. 読者としての祖母の姿

これまで、祖母がセヴィニエ夫人についてどのような考えを持っているのか、彼女自身の発言や語り手と母の言葉から、間接的な仕方でもみてきた。しかし意外なことに、直接に祖母の口からセヴィニエ夫人のこういうところがこういう理由で好きだと語られる場面はひとつもない。バルベックに滞在している間は母と毎日手紙を交わしていることになっているものの、その手紙の文面も読者は読むことができない。また、語り手や母が祖母の趣味を参照する形で他の読者と自分たちを差異化しているのに対し、祖母自身は先に見たヴィルパリジ夫人とシャルリュス男爵の議論の場面ですら自分の意見を言うことなく黙ったままでいる。

#### 祖母による引用

読者に対して明示的に示される祖母のセヴィニエ夫人との関わりは、会話の中でされる書簡の引用である。祖母による5回の引用は次のようなものである。

ヴィルパリジ夫人がバルベックに取り寄せた果物について、それがホテルの出すものよりおいしいと言うために、祖母は「気まぐれでまずい果物が欲しくなればパリから取り寄せなければならぬ、というセヴィニエ夫人の言葉は当てはまりませんね」<sup>35)</sup>と言う。これは1694年9月9日の書簡<sup>36)</sup>の、旅行先のグリニャンで食べたメロンをほめた言葉の引用である。

バルベックのホテルの食事については、祖母は他にも「飢え死にするほど見事」<sup>37)</sup>と皮肉を言っている。これはセヴィニエ夫人が1689年7月30日の手紙<sup>38)</sup>の、ヴァンヌの司教から食事に呼ばれた時に自分は子牛か鶏を食べたかったのに野鳥が出されたことについて書いた表現である。

また、シャン＝ゼリゼで尿毒症の発作を起こした時に、公衆便所の周りにいる人々の会話がやりきれないということを祖母は「彼らが私〔祖母〕に『別れの楽しさ』を準備してくれた」<sup>39)</sup>と表現するが、この「別れの楽しさ」という言葉は、1680年6月21日の手紙<sup>40)</sup>でいやなお客が去ってくれるときの気持ちを書いた文章からの引用である。

また次の引用は少し長めのものである。病気になった後祖母は医者から運動を勧められるが、もうベッドから出る気になれず1693年6月3日の手紙<sup>41)</sup>を引用して自分を正当化しようとする。

祖母はセヴィニエ夫人がラファイエット夫人について書いた手紙で反論したが無駄だった。「みんなは彼女が出かけたがらないのは気が狂ったからだといいました。私はそういう、拙速な判断をする人々に言いました、『ラファイエット夫人は狂ってなどいません』と。そしてそう言うにとどめました。彼女が出かけたくなかったのは当然だったと彼らにわからせるためには、彼女は死ななくてはなりませんでした。」<sup>42)</sup>

こうした引用からは、祖母のどのような趣味が読み取れるだろうか。セヴィニエ夫人の文章の美点として先に挙げたことがらのうち、機知のきいた表現の才は、ここで引用された手紙にも認められる。また母性愛が関係する手紙も、バルベックに出發する時のパリの駅での場面で登場する。母と離れ離れになるのがつらい語り手を母がなだめるが、それを見て祖母は「娘や、まるでお前にセヴィニエ夫人を見るようだよ。地図を前にして目を離さないセヴィニエ夫人を。」<sup>43)</sup>と言う。これは1671年2月9日の手紙<sup>44)</sup>の、娘のグリニャン夫人がプロヴァンスに向けて出發した後、彼女の旅程を地図の上でなぞっているという文章への言及である。祖母の引用は時宜を得た適切なものである。ただ、この引用でセヴィニエ夫人と重ねられているのは祖母ではなくて母である。祖母はセヴィニエ夫人の愛読者ではあっても、必ずしも自分と彼女を同一化したいと望んでいるのではない。それよりも、これら5つの引用からは、彼女の関心はセヴィニエ夫人の手紙に出てくる場面をできるだけ自分の生活の中にみい出すことにあるのではないかということが想像される。

### 引用の喜劇的側面

祖母は他の表層的な読者とは違って真の理解者とされていることを先に確認した。しかしブルーストの書き方は、常に祖母を賞賛するものではない。そこにはいくらかのユーモアが含まれているように感じられる。先に挙げた場面でも、尿毒症の発作という生命の危機を迎えた時に「別れの楽しさ」という、この世との別れを暗示するような引用をするのは健気でもあるが少し滑稽でもある。病気のベッドでも自分の主張を通すために引用し、そしてそれが聞き入れられず、しかも結果として引用の通りそのまま死んでしまうということにはどことなくおかしみがある。また、はなはだしい場合として次のような場面では、祖母が何も喋っていないのにその場に居合わせた語り手が彼女の考えていることを推測してしまう。次に挙げるのは、バルベックでヴィルパリジ夫人がセヴィニエ夫人の誠実さを批判する先にも挙げた場面である。彼女はここで、祖母が母と毎日手紙のやり取りをしていることに疑問を呈する。

「なんですって、娘さんは毎日手紙をおよこしになるの。でもよく話すことを見つげるわね。」祖母は黙ったが、それは軽蔑心からだったと考えられるだろう。彼女はママに、セヴィニエ夫人のこういった言葉を繰り返していたからだ。「お手紙をもらうと、またすぐ次のがほしくなります。お手紙を受け取るときしか、ホッとする時はありません。私の感じることをわかってくれる人はほとんどいません。」そして私は、祖母がヴィルパリジ夫人に次のような結論を適用しはしないかと恐れた。「私はそういった少数の人々を求め、他を避けます。」<sup>45)</sup>

この場面では、祖母はヴィルバリジ夫人の言葉に対し終始黙ったままで自分では引用していない。その場の状況に合うようなセヴィニエ夫人の一節を思い出しているのは語り手である。しかしセヴィニエ夫人の言葉を繰り返していたのはあくまで祖母であり、語り手は祖母によって何度もなされた引用が、今この場面でも祖母の頭の中でなされているに違いないと考えているのである。語り手のこの推測が正しかったのかどうかはわからない。しかしこの場面は、語られない場面でも祖母が頻繁にセヴィニエ夫人の引用をしていること、またそれがあまりに頻繁なので、周りにいる人たちには祖母の考えていることがある程度推測できてしまうということを読者に示す。これは、祖母のセヴィニエ夫人への偏愛の滑稽味を要約的に表しているといえないだろうか。現実の生活を可能な限り『手紙』と重ねようとする態度はいささか極端であるし、さらにそれによって他人に思考を読まれているのも喜劇的である。ベルクソンは『笑い』で、古典喜劇においてはある身振りが繰り返されることによって観客に「人物の内部に働いている機械というヴィジョン」<sup>46)</sup>が与えられ、それが滑稽味を生むと言っているが、この説明が祖母の場合にも当てはまるのではないかと思われる。

したがって、祖母はセヴィニエ夫人についてはたしかに正統的な理解をしているが、その読者としての姿はほのかに笑いを誘うような人物として描かれていると言える。

祖母がブルーストの理想とする読者像とは重ならないことは、ブルーストの読書論を見てもわかる。ブルーストは1904年に翻訳したラスキンの『胡麻と百合』の序文として「読書について」という文章を書いている。のちに「読書の日々」と改題されるこの文章で強調されるのは、読書の両義性である。「読書は精神生活の入り口にある。それは我々をそこに導き入れるが、それを構成しはしない。」<sup>47)</sup>という表現や、「個人的な精神生活へと目覚めさせるかわりに、それにとってかわろうとする時、読書は反対に危険なものになる」<sup>48)</sup>といった部分には、読書それ自体が精神生活になってはいけないという考えが表れている。読書についてのこの考え方に祖母の態度を照らすならば、彼女の読書はブルーストの理想どころか、彼が危険なものとして警戒するまさにその状態に陥っているとすら言える。正統的な解釈をし細かい部分までよく記憶している祖母だが、自分の思考そのものまでセヴィニエ夫人の手紙で構成している様子は、滑稽なものとして描かれているのである。

### ブルースト自身の引用

しかしここでまた興味深いのは、ブルースト自身書簡の中でセヴィニエ夫人を引用する時には、祖母と同じように状況に合わせて引き合いに出しているだけである場合が多いことだ。ロジェ・デュシェーヌはその引用の仕方を次のように評している。

ブルーストは『手紙』を自分の作品の大きな主題のひとつにし、人口に膾炙したセヴィニエしか知らないスノップとそこに愛の物語の悲劇を見出す真の玄人読者を対置したが、一方で書簡では彼自身が多くの場合凡庸であることに満足する人々に属している。<sup>49)</sup>

祖母を「愛の物語の悲劇を見出す真の理解者」と位置づける点は本論と少し考え方が異なる。すでにみたように、祖母自身が親子の愛に関連するテーマを導くのは一度きりで、むしろ例外に属する。ただ、デュシェーヌが感じている困惑は次のような書簡を見ると共有できる。

その原因というのは、このあたりではあちこちで刈り草干しをしているのです。あなたはセヴィニエ夫人を十分よく知っているから、刈り草干しが何かおわかりでしょう。それは美しいものだけれど、私を苦しめます。<sup>50)</sup>

これは1896年8月にモン＝ドールからブルーストがレーナルド・アーンに宛てた手紙である。当地では刈り草が行われていて、それがブルーストに喘息の発作を起こさせたいことが書いてある。ほのめかされているセヴィニエ夫人の手紙が小説中でどのように扱われているかはすでに見たとおりである。この矛盾について、デュシェーヌは社会的自我と芸術的自我は別のもののだと説明しているが、それをもう少し敷衍するなら、作家や文学作品に言及することについて、小説を書くブルーストは現実生活におけるよりも意識的になり、それに社会的・文学的な意味や背景を見出そうとしたのではないかと思われる。

## 結論

『失われた時を求めて』の人物たちがセヴィニエ夫人についてどのように語り、またその姿がブルーストによってどう書かれているかということを検討してきた。まず、愛読者である祖母、文学的価値を疑おうとするヴィルパリジ夫人、それに反論する形で擁護するシャルリュスといった人物たちの発言は、現実のセヴィニエ夫人批評を再現したものであるといえる。また、語り手とその母はセヴィニエ夫人について語る時に祖母の趣味を規範として参照し、それによって『手紙』の文面の表層的な理解しかしない読者たちが批判される。しかしセヴィニエ夫人の理解者としてではなく、一般に読書をする人物としては祖母はややゆきすぎた例であり、滑稽味をまじえて描かれている。

本論のこうした検討から、次のことが言える。すなわち、小説中で直接名指されることとブルーストに影響を与えたことが別次元のものとして論じられるべきであるのは当然であるとして、特にセヴィニエ夫人の場合、小説中での言及がブルーストの意見から独立してある構造を持っているということである。文学について語る文学作品は小説的文学論と同義ではないといえるだろう。そしてこのことから今後の課題も導かれる。まず、セヴィニエ夫人の場合に限らず他の作家への言及についても同様に、それらがブルーストの個人的な見解とは別の背景を持っているといえるかどうか。またその背景として本論では文芸批評のみを探求の対象としたが、より広い知的文化風俗の文脈を考慮し、小説という形式で文学について語ることの射程を推し測ること。さらに、『失われた時を求めて』の執筆の過程で作家への言及の仕方にどのような変化が起こっているかということの調査である。これらの論点から今後、『失われた時を求めて』の批評と小説

の合体という性質の内実を探求していきたい。

## 註

- 1) 本稿は、2010年1月に京都大学大学院文学研究科に提出した修士論文「Proust et Mme de Sévigné」に加筆修正したものである。なお、引用の日本語訳はすべて拙訳だが、『失われた時を求めて』については井上究一郎訳（ちくま文庫、1992-1993年）を参考にして訳した。
- 2) 国際シンポジウム「Proust en son temps」における和田章男の口頭発表（2009年4月19日、於東京）「L'Apparition des noms réels dans les Cahiers de Proust」配布資料。
- 3) *Correspondance de Marcel Proust*, texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, Paris, Plon, 21 vol., 1970-1993 (略号 *Corr.*) t. XIX, p. 643.
- 4) Dagmar Wieser, « Proust et Mme de Sévigné », *Revue d'histoire littéraire de la France*, 100e année, n. 1, janvier-février 2000, p. 91-106.
- 5) Elisabeth Ladenson, « The Law of the mother : Proust and Madame de Sévigné », *The Romanic Review*, vol. 85, janvier 1994, p. 91-112.
- 6) Jo Yoshida, *Proust contre Ruskin : la genèse de deux voyages dans la « Recherche » d'après des brouillons inédits*, thèse 3<sup>e</sup> cycle présentée à l'Université de Paris IV Sorbonne, 2 tomes, 1978, t. 1, p. 18-19.
- 7) *Lettres de Mme de Sévigné, de sa famille et de ses amis*, édition par M. Monmerqué et revue par Régnier, Paris, Hachette, 9 volumes et 1 album, 1862.
- 8) Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, édition publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, Paris, Gallimard, 1987-1989 (略号 *RTP*, 巻号をローマ数字で表す) « Bibliothèque de la Pléiade », 4 vol., II, p. 1340 (« notes et variantes » par Pierre-Louis Rey).
- 9) *RTP*, II, p. 13.
- 10) *RTP*, I, p. 20.
- 11) *RTP*, II, p. 94.
- 12) Mlle de Scudéry, *Clélie*, IIIe partie, livre III [1657], édition critique par Chantal Morlet-Chantal, 2003, p. 458.
- 13) Mme de La Fayette, « Portrait de Mme de Sévigné », *Lettres choisies de Mme de Sévigné*, Paris, Garnier Frères, 1876, p. xviii.
- 14) *Grand Dictionnaire Universel du XIXe siècle*, Librairie classique Larousse et Boyer, 1866-1878, article « Sévigné [ lettre de Mme de ] ».
- 15) *Ibid.*
- 16) *RTP*, II, p. 56-57.
- 17) Roger Duchêne, *Madame de Sévigné, la lettre d'amour*, Paris, Klincksiek, 1992, p. 250.
- 18) *Id.*
- 19) *RTP*, II, p. 121.
- 20) C.- A. Sainte-Beuve, *Portraits de Femmes*, Garnier Frère, 1845, p. 12.
- 21) *RTP*, II, p. 122.
- 22) *RTP*, II, p. 625.
- 23) *RTP*, III, p. 167.
- 24) *RTP*, III, p. 526.
- 25) *RTP*, IV, p. 236.

- 26) Mme de Sévigné, *Correspondance*, 3 vol., texte établi, présenté et annoté par Roger Duchêne, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1977-1978, t. I, p. 130-140.
- 27) *op. cit.*, t. I, p. 303-304.
- 28) RTP, II, p. 13-14.
- 29) Paul Morand, *Tendres Stocks*, « Préface » par Marcel Proust, Paris, Gallimard, 1921, p. 26-27.
- 30) *Nouveau Larousse Illustré*, Larousse, 1898 article « Sévigné [ lettre de Mme de ] ».
- 31) Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust, biographie*, Paris, Gallimard, « NRF Bibliographie », 1996, p. 37.
- 32) Roger Duchêne, *L'impossible Marcel Proust*, Paris, Robert Laffont, 1994, p. 180.
- 33) *Corr.* t. I, p. 138.
- 34) *Corr.* t. I, p. 131.
- 35) RTP, II, p. 57.
- 36) Mme de Sévigné, *op. cit.*, t. III, p. 1058-1060.
- 37) RTP, II, p.54.
- 38) *op. cit.*, t. III, p. 653-658.
- 39) RTP, II, p. 608.
- 40) *op. cit.*, t. II, p. 980-985.
- 41) *op. cit.*, t. III, p. 1006-1009.
- 42) RTP, II, p. 597.
- 43) *Ibid.*, p. 9 .
- 44) *op. cit.*, t. I, p. 151-154.
- 45) RTP, II, p. 56-57.
- 46) Henri Bergson, *Le Rire* [ 1899 ], Paris, PUF, 2007, p. 24.
- 47) Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p. 178.
- 48) *Ibid.*, p. 180.
- 49) Roger Duchêne, « Proust, lecteur de Mme de Sévigné », *Offene Gefüge : Literatursystem und Lebenswirklichkeit*, Tübingen, Gunter Narr, 1994, p. 237.
- 50) *Corr.* t. II, p. 106.